

UFOがくれた夏 上

川口雅幸 Masayuki Kawaguchi



アルファポリス文庫

もしもこの世に 歌というものがなかったら
伝えられない思いが たくさんあるかもしれない
伝えきれない思いが いっぱいあるかもしれない
もしもこの世に 歌というものがなかったら
大切なことも 大切なところも
忘れ去られてしまうかもしれない

この先 大人になつてから
いつかどこかで その歌を聴いた時
オレは 何を思うんだろう
みんなは 何を思い出すんだろう……

この物語はフィクションです。
実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。
全て創作であり、
現実の出来事をモデルにしたものではありません。

もくじ

第一章	宇宙から来た恋のキューピッド	7
第二章	イケメン魔術師カイドー	77
第三章	謎のメツセージボトル	141
第四章	秘密結社K S G 団	209

〈下巻もくじ〉

第五章	コバルトブルーの誓い
第六章	砂に描いたフォーエバー
第七章	旅立ちの日に
エピローグ	

第一章

宇宙から来た恋のキューピッド

受話器をとるや否や、

「今ならまだ見えるよ！」

いつになく興奮したような甲高い声が、心地よく耳に飛び込んできた。

「早く早く、外に出てみて！」

またあのUFOが現れたらしい。

慌てて電話を切り、急いで玄関から飛び出すと、

「えへ、ひっかかった」

そこにはあいつが、いたずらっぽい笑みを浮かべて立っていた。

「ごめんね、突然」

持っていたケータイをパタッと閉じ、ひと呼吸おいてから、

「大事な話があるの。一緒に来て」

急に真顔でそう言い放つなり、あいつは長い髪をひるがえした。

腹の奥底のほうで、何かが、大きく弾むのを感じた。

それっきり何も言葉を交わさずに、オレたちは海に向かって歩いた。

ケータイのストラップについている小さな鈴が、あいつの足音と一緒に、

リリ、リリ……と、短く、鳴り続けていた。

夕暮れ前の渚なみは他に人影もなく、少し涼しくなった風が、ひたすら静かに

潮の香りを漂なびわせていて。

水面みなもにちりばめられたダイヤモンドのきらめきも、黄昏たそがれゆく夏空と共に移うつ

ろいながら、やわらかな揺ゆらめきへと趣おもむきを変えてゆく。

「ねえ、遼哉りょうやくん」

ふわりと舞まった、艶つややかな髪。

さらさらと音がしそうなその栗色のストレートを耳にかけたまま、俯うついた

横顔よこがほがふとつぶやく。

「ずっと言えなかったんだけど、私ね、前から遼哉りょうやくんのこと……」

急に潮騒うしなよりも大きくざわめき出した胸の奥に、ごくりと唾つばが送り込ま

れる。

浅瀬あさを見つめる長いまつ毛が、眩くらしそうに何度か瞬まいたかと思うと、

「ねえ」

ふっと振り向いた瞳ひとみが、大人っぽいその切れ長の目が、真まっ直ちぐにオレを

映うつし出した。

「キスして」

ズワン…… シュワー

ふいに打ち寄せた大波の白い縁えりが、甘いメロデーみたいな緩やかな起伏

を描えき、足元の色をしっかりと変えてゆく。

ズワン…… シュワー

ふいに打ち寄せた大波の白い縁えりが、甘いメロデーみたいな緩やかな起伏

光と影のほかに何も無い、すべてがオレンジ色に染められた二人だけの世界。

風が止むと、一瞬、曲と曲の合間のような、透き通った静寂に包まれた。

「は、晴香……」

その瞳を見つめ返せば、あいつの艶やかなくちびるも小さく動く。

「シヨウちゃん……」

……え？

「行かないでシヨウちゃん、お願いよ」

えええ!?

「私をひとりにはしないでよう」

そこには、今にも泣き出しそうな見知らぬ顔が――

……イピイピイピイピイピイピイピイピイピイピイピイ!

防犯ブザーばりにけたたましい音で、はっと目が覚める。

「もう、誰なんだよあれ」

鳴り響くそれに手を伸ばし、大きなあくびを一つ。

「つたく、いいところだったのに」

最近よく見る、あいつの夢。

ただどこそこに突如、あの誰とも分からない髪の短い女の人が、いつも決まって現れる。

まあ、夢ってのは大抵が意味不明だからな。

奇想天外なストーリー展開で、オチもなくうやむやのまま終わってしまうのがほとんどだ。

「それにしても、今日のはまた一段とリアルで刺激的だったなあ」

途中までは、まさに理想どおりの素晴らしい内容だった。

「でもあいつ、いきなりアレだもんなあ。オレにだって心の準備してもんが」

ニヤニヤと、思い返しながら微ま睡どんでいたら、

「リヨウちゃん、今日も早く出るんでしょ。いいかげん起きなさいよー」
ドアを容赦なく貫通してくるお母さんのイライラ声で、完全に夢が破ら

れた。

「いつてきまーす」

薄暗い団地内に、今日もリズムカルな靴音を響かせてやる。

踊り場から踊り場へ、短いコンクリート階段の連続を三段抜かしジャンプを交えながら一気に駆け下りると、外は眩しい陽の光に満ちていた。

何だかすごく清々しい朝だ。

まだ涼しさの残る六月の澄んだ空気を思いっきり吸い込んだら、意味もなく何かいいことがありそうな気がしてきて。

もう一人の自分に背中を押されてるかのごとく、軽やかなテンポで弾むランドセルに急かされ、オレはいつものように海岸へと続く坂道を早足で下った――

この町に来てから、もう三ヶ月になる。

本当は、転校する時期を、せめて中学に上がる時に合わせてほしかったん

だけど、お父さんも会社の都合には逆らえないみたいでさ。

って言うか、そういう希望を口に出せる状況じゃなかったみたいで。まあ、そんな感じでシブシブ引っ越してきたわけなんだけど。

ここに来たばかりの頃はえらく殺風景だと思っていた団地周辺の景色も、季節の移りかわりと共に、気が付けば緑色の割合がぐんと増え、随分とにぎやかになった。

オレはと言えば、いろんなことに慣れてきたせいもあってか、生活にも少し余裕が感じられるようになったし。

やっぱり暖かくなると身も心も軽くなってくるのかな。最近はどう、雨の日以外は朝から半袖一枚で十分だ。

考えてみれば、あと一ヶ月もすれば夏休みだもんな。これから楽しい季節がやってくる……そう思うだけで何だかワクワクしてきちゃう。

それにしても、これだけポジティブな考え方ができるようになったのは、あいつと知り合えたからに他ならないだろう。

出逢いは、新学期早々の思いがけない席替えだった。

偶然にも隣の席になった時は、思わず心の中で「キターッ！」って叫んじまったのを覚えてる。

実は、転校初日に皆の前で自己紹介させられた時、既に気付いてたんだ。緊張して焦点の定まってるオレの目を、ハッと見開かせてしまうほどに際立ったその存在に。

頬杖をついたまま長い髪をかき上げ、こちらをジッと見ていた大人っぽい子。雰囲気のわりには、並ぶと意外に背が小さい、いろんな意味でアンバランスな女の子。

そう。それが『あいつ』ことクラスのアイドル、『染井晴香。十一歳★』だ。

ちなみに、『』と最後の『★』は発音せず、フルネームと年齢とをワンフレーズで「一気に読んでネ！」だそう。よく分かんないけど。

ええと、身長百四十一センチメートル、体重三十二キログラム、スリーサイズは上から八十七、五十五、八十三のすごい超セクシーダイナマイトになるよ・て・い、ハート。山羊座のAB型で、特技は黒目リレーと八時間耐久カ

ラオケ♪ 趣味はお茶とお花がますますわよオホホホ……ああ、これ全部本人から渡されたプロフィールに書かれている情報ね。

晴香は、この通り見かけによらず（っていうかオレの勝手なイメージだったのかもしれないけど）かなりオチャラケてるものの、その分接しやすくて気さくな子で。

消しゴムを忘れて困ってれば、わざわざ自分のを半分に分けて「これ、あげる」なんて、さりげなくやさしかったり、「その代わり、今度もしも私がコンパス忘れたら半分こだからね」なんてアホな冗談も言ったりする、すごく明るい子だった。

そんな感じだから、転校早々独り浮いてる間もなく、自分の居場所みたいなのがそこにできた気がして。

小さい頃からわりと人見知りする性格だったこのオレが、こんなに短期間で、しかもあんなクラスに溶け込むことができたのも、居心地のいい『晴香ワールド』がバックグラウンドにあったからこそだろう。

だから、日を追うごとにあいつがオレの中でどんどん特別な存在になって

いくのは、当然の流れだったのかもしれない。

いつからか夢にまで見るようになったりして。参るよな、マジで。出てくるから余計に気になっちゃったりして。

「あ、おはようございます」

「はい、おはようさん。今日も暑くなりそうだねえ。気を付けていくんだよー」

坂を下りきったところで、毎朝すれ違う犬の散歩おばさんと挨拶を交わす。そして、いつものように信号のない横断歩道をダッシュで渡れば、そこはもう見渡す限りのグラデーショナルブルー。空と海とが織りなす広角のパノラマが、今日も変わらず両手を広げて待ち構えてる。

穏やかな潮騒に耳をくすぐられ、誘われるようにそちらへ足を踏み入れれば、靴底をやさしく包み込む白い砂の感触。歩くたびに「早く裸足になっちゃいなよ」と囁いているかのよう。

前の学校じゃ考えられないほど贅沢な通学路だ。いや、実際には通学路と並行しているだけで、これも立派な寄り道になっちゃうのか。

「さてと、何かいいもの落ちてないかなあ」

白砂しろすなの渚が、緩やかなカーブを描きながら延々と続く、道なき道。

毎朝のことながら胸を躍らせつつ、波打ち際をゆつくりと歩き出す。

ちよつと早めに家を出て、今日も登校しながらのビーチコーミング※。オレのセレブな日課だ。（※ビーチコーミング＝海岸にある漂着物を集める遊び）

なんて、毎日欠かさず寄り道する本当の理由は、また別にあつたりするんだけど……

「遼哉くん」

「来た」

後ろから聞き慣れた元気な声が追いかけてくると、目の前の景色がより鮮明に、パーツと開けた。

分かっているのに、毎朝のことなのに、やっぱり嬉しくなってしまう。

「おはよー！」

振り返る間もなく、隣にいつもの笑顔が走り込んできたかと思うと、

「ねえねえ知ってる!？」

次の瞬間には長い髪をクイックターンでひるがえし、いきなり目の前に現れる『染井晴香。十一歳★』。

「昨日の夜、またあの謎の光が出現したんだって!!」

らんらんと輝く大きな瞳が、行く手を阻むように立ちはだかる。

毎度のことだけど、何でこの子はこうやって真正面に構えて他人の目をジッと見るんだらう。

って、あんな夢を見ちゃった今日は特にそれ、ちょっと、タイミング的に困るんだけど。

「遼哉くんは見た見た？」

「あ、いや、オレは、見てないけど」

こっちはそれどころじゃないんだってば。

ああ、やばい、まともに目を合わせられないよ。

「ねえ、何か顔赤いよ? どうしたの?」

うわ、聞くな、頼むから聞かないでくれ。

ってというか、その殺人的美顔を近づけてくるのは反則だぞ。もはや凶器だ、犯罪だ。

しかも今日に限って、やけに口元をチラチラ見てくるような気がするな。余計に意識しちゃうじゃんか。

しかし晴香は、そんなドキドキMAXのオレをよそに、今度は鼻で深呼吸をするように大きく息を吸い込むと、すーっと目を閉じ、

「んー……」

って、どういうつもりだ。

まさか、これって、このシチュエーションって——

「は、晴香……」

「……ブルーベリー!」

突然パッと目を見開いたニコニコ顔が、いきなり手鏡を突き出してくる。

何事かと、そこに映り込んだマヌケ面をよく見れば、

「げっ」

何と口の周りに、赤紫のカピカピがくっついてるではないか。

すると晴香は、人差し指を顎に当てるモーションで、「ラズベリーと迷ったんだけど、この香りは間違いないね。今朝のトーストはブルーベリージャム！」

などと嬉しそうに名推理を展開し、勝ち誇ったような笑みを浮かべてる。と思っただけの瞬間、

「ねえ」

急に真顔になった『凶器』が、また真正面からジッと見つめてきた。

「さっき、キスしようとしたでしょ」

「キ、キキ、キキス!? ま、まさか、そんなこと、オレ」

落ち着け、こんなに慌てちゃったら凶星みたいじゃなか。凶星だけど。

でも、そういうエロいやつだと思われたくないから、頑なに否定してやった。

こんなことで嫌われたくないから、身の潔白を必死に訴えたんだ。

そしたら、今度は寂しそうに俯きながら、

「なーんだ。ちょっと期待してたのにな」

って、マジデスカッ!?

もう、どうしていいのか分かんなくて超シドロモドロになってたら、瞬間にいたずらっぽく変化した小悪魔スマイルが、「うっそーん」へへーと舌を出した。

「もお、ちゃんと顔洗ってきなよー。お子ちゃまなんだからあー！」

きゃはははと笑いながら、さっさと駆け出してやがる。

完全にしてやられた。妙な夢なんか見るからだ。

だいたい思わせぶりなんだよ、いつも。

「じゃあねー! 先に行ってるねー！」

夏の気配を帯びた青空に、まるで黄色い花のような声を咲かせながら、赤いランドセルが駆けてゆく。

今日もまた、あいつのいる鮮やかな一日が始まったのだ。

「やれやれ」

何だか振り回されてるような気もするけど。

こういうドキドキが、『学校砂漠』に潤いを与えてくれてるのかもしれない

いしな。

「毎日楽しいぜ、まったく」

オレは口の周りをゴシゴシやると、結局今日もビーチコーミングそっちの
けで、学校へと足を速めた。

2

教室につくと、そこから中謎の光の話題で持ちきりだった。

「ガチでやばいって。これで今月に入って三回もだぜ？」

「ああ、かなりやばい兆候だよな。Xデーは近いとみた」

こっちで男子が、真剣な顔で話しているかと思えば、

「昨夜の^{ゆべ}って、海岸付近にまで接近してきたらしいじゃん！」

「そうなの〜!?」「やー、こわ〜い！」

あっちでは女子たちが、泣きそうな顔して騒いでる。

最近、校内でもつばら噂になっている、『UFO多発襲来事件』。

謎の光に関しては、以前から白波海岸の怪奇現象として有名だったらしい
んだけど、これだけ頻繁に目撃されることは未だかつてなかったんだって。

にしても今朝は一段と騒がしいな、と思っていると、

「だからよ、絶対ジョーカーは怪しいぜ」

「そうそう」「絶対怪しい！」

ひと際騒々しい声たちが耳に飛び込んできた。

「もしかしてあの爺さん、宇宙人とコンテストしてるんじゃないか!？」

「それを言うなら、コンタクトな」

「そう言えばうちの兄ちゃんがさ、新型インフルエンザって実はUFOが関
係してるらしいぜって言ってた」

「知ってる知ってる！ 宇宙人陰モウ説！」

「『陰謀説』じゃ、このバカチンがあー！」

窓際の後ろのほうでやたらと盛り上がっているこの連中は、谷口大那を中心とする『大那グループ』だ。

もちろん、本人たちがそう名乗っているわけじゃない。この六年二組の、いわゆる問題児たちにつけられた、先生たちの間での通称だ。

このクラスは、五年生の時にもの凄く荒れていたって聞いた。しまいには担任の先生がノイローゼで学校をやめてしまうほどひどかったみたいなんだけど、その核になっていたのが、成瀬、木ノ内、内海、塚田、そしてリーダーである谷口大那の五人組だったらしい。

どうやら大那の反抗的態度がその発端で、次第に周りの子たちも感化され、事態はどんどんエスカレートしていったということだった。

ロッカーにランドセルを押し込めていると、

「おい、吉野」

その大那が、ひとつだけ並びからはみ出た一番後ろの席にどっかりと腰かけたまま、「団地からは見えただか？」と話しかけてきた。

「いや、オレは……」

、返事をするかしないかのうちに、やつのごつい顔がニヤリと笑う。

「お前、昨夜のはマジヤバだったんだぜー」

ワックスで立たせたツンツンヘアをしきりに摘みながら、得意げに語り始める。

大那は、どう見ても小学生には見えない。背が高ただけじゃなく、全体のパーツ一つ一つが『規格外』のサイズを誇っている。

ジェスチャーするたびに行き交う手は、明らかにオレの一・五倍くらいはありそうだし、タンクトップから露出した肩は威嚇するかのよう張り出していて、まるで中学生だ。それも、夜、コンビニの前に集まってそうな怖い中学生。

実際、見た目どおり相当な乱暴者らしく、キレて見境なく金魚鉢をひっくり返したという『金魚爆弾事件』は、もはや伝説と化している有名な話で。

正直、できればあんまり関わり合いたくないんだけど、幸か不幸か時々こんなふう普通に話を振ってくれたりする。ありがたいようなありがたくな

いような微妙な気分だ。

それでついつい目を逸らしがちになるもんだから、「おい吉野、聞いてんのか。オラッ」って、結局また絡まれちゃったよ。

「はい、みんなー、席についてー」

そこへタイムイングよく、極細の甲高い声と共に岩清水先生が入ってきた。どやどやと、それぞれが自分の席を指指して移動を開始する中、案の定、窓際の後ろの大那たちだけはお構いなしだ。

「ほら、成瀬くんたちもー」

さっそく注意されると、

「せんせー」

大那がさすが手を挙げる。

「今、すっげえ盛り上がってるから、もうちょっと待ってください」

始まったよ、今日も。

「でも、もう時間だから……」

「俺ら、昨日あのUFO見たんですよ。だからめっちゃテンション高くて」

なあ！ と同意を求める大声が、細い声を完全に打ち消す。

こうなると、周りに立ってる四人も黙っているわけがない。

「いいじゃん、アヤノちゃん。朝の会の時くらい」

アシンメトリーに垂らした前髪をクールに払いつつ、ナンバー2の成瀬が乗れば、

「そうそう！」「俺たち、地球がどうなるかって真面目な話してるんだから」
内海と木ノ内の、割れた変声期ボイスによるコンビネーション攻撃が続く。
そうしてる間にも、塚田がまた大那に何やら突っ込まれて大笑いしてる。

「んー」

先生は困った顔をして、メガネに手をやりながら、「仕方ないわね」と苦笑いを浮かべた。

「じゃあ、今朝は特別よ」

途端に教室全体がにぎやかさを取り戻し、あちこちで話の花が咲き乱れる。堂々と髪を梳かしはじめる女子がいるかと思えば、我関せずで一人もくもくと読書続けるやつもいて、皆一気に自習モード全開って感じ。

いつものことだ。いや、いつもより悪いか。今朝は朝の挨拶すら省略だもんな。

——「六年二組は、新任の岩清水綾乃先生という、穏やかでやさしい女の先生が担任です」

挨拶をしにいった時、校長先生からそう言われて、安心しきっていたあの頃。

確かにそのとおりだったけど、クラスそのものが穏やかでないってことは、まったく予想もしていなかった。ちょっと騙された気分だった。

だって、こんな無法地帯、前の学校じゃ考えられないよ。

新学期早々の席替えにしても、自分が一番前の席なのが気に入らないからって、大那が言い出したのが発端だ。

しかも、男女の並びを無視して勝手に窓際に移るといふ荒技が許されるなんて、信じられなかった。

挙句の果てには、「ずるくなくらい？ アタシも端っこがいい〜」なんて便乗する女子も出てくるしき。もうむちゃくちゃ。

まあ、席替え自体はラッキーだったし、オレとしてはクラスがどうであろうと大した問題じゃない。

いや、ぶっちゃけ別にどうでもいいんだ。一年間大人しくやり過ごせばすむことだし。

どうせ中学に上がれば、みんなバラバラになるんだから。

結局その日は一日中、UFO騒ぎに終始した。

この手の話は大好きなんだけど、オレ自身はそういう不思議体験をしたことが一度もない。

だから、皆の注目的になっている大那たちのことが、ちょっぴり羨ましくもあった。

放課後の砂浜は、照りつける太陽を跳ね返し、まるで真夏のような眩しさを放っていた。

「しっかし、マジ暑いなあ」

おとなしく松林に囲まれた日陰の遊歩道を行けば、涼しいのは分かっている。だけど、せっかく海の傍にいるんだもん、もったいない気がする。

なんとなく海辺は宝の山だ。文字通り、宝物がゴロゴロ転がっているんだから。

中でも、ガラスの破片が波にもまれ、長い年月をかけてできるシーグラスは、世界中にコレクターがいるくらいメジャーなお宝で。

何を隠そう、オレも小さい頃からその『海の宝石』に魅せられてきた一人なのだ。

Tシャツの裾をバフバフやりながら、砂浜通学路の帰り道を今日もひとり、ビーチコーミングに明け暮れる。

とは言え、はたから見れば、『入り江を俯き加減でトボトボ歩く寂しそうな少年』ってとこだらうか。探すとき意外に見つからないもんなんだよな、シーグラスって。

「はあゝあ」

人気のない穏やかな海辺は、頭の中を寄り道させるのにも最適な場所かもしれない。

そう。気が付けばいつも、あいつの笑顔を思い浮かべては、ぼーっと歩いている。

本当は帰り道も一緒になれたらって思うんだけど、そうもいかない。

あいつときたら、帰りの会が終わった瞬間に駆け出して、いつもソッコウでいなくなっちゃう。

とにかく神懸りの早いんだから。あいつより先に教室を出た子を、オレはまだ見たことがない。

それより何より、一緒に帰ろうだなんて、オレがあいつにそんなこと言えるわけがないもんな。

「晴香、かあ……」

あいつはいつも元気で明るくて、おまけに芸能人レベルでかわいときてる。それでいて皆にやさしいもんだから、女子からも男子からも人気があつて。

つまり、あれはオレだけに向けられたかわいさではないし、オレだけが特別扱いされているわけでもない。

何となくフィーリングが合うような気がするの、たぶん、オレたちの共通点のせいだろう。

晴香も去年ここへ転校してきたらしいから、よそ者同士ということで、多少は身近に感じてくれてるんじゃないかな。

まあ、どっちにしても、オレなんかとは到底つり合わない子であることに変わりはない。

それに、オレには分かっているから。あいつには、他に誰か好きな人がいるんだってことが。

そしてそれは、恐らく他の皆も知らないであろう、誰にも秘密の相手だということも……

「ぬおっ！」

突然、ガツンと何かにつまずいた。

どうにかコケずにはすんだものの、つま先がジンジン痺れてる。

「いってえな、もう」

睨みつけるように振り返れば、すぐ後ろに尖った石のようなものがあるではないか。

「なんだこれ」

拾い上げてみると、手の平大の赤黒い三角形で、別段、重くもない。

ましてや地中深く突き刺さっていたわけでもないのに、あの強い衝撃は一体何だったというのか。

不思議に思いながら、角度を変えてあちこち見てみると、ゴツゴツ尖った部分とは別に、断面らしきザラザラした面もある。

どうやら瓦とか、そういう何か陶器類のカケラのようなだ。

いずれにせよ、こんな尖ったガレキは危険だし、どう見ても砂浜には似つかわしくない。

オレは少し下がってから助走をつけると、つま先の痛みに対する多少の恨みも込め、コイツを遥か海の彼方に葬るべく、思いっきり腕を振りかぶった――

その時。

——レサマワレキオ レオナルトウ……

不意に、耳元で誰かに何か囁かれた気がした。

とっさに手を止めて辺りを見回したが、誰もいない。

不審に思いつつも気のせいだろうと自分に言い聞かせ、もう一度投げようとしたのだが、

「え、あれ……」

今度は別の異変に気が付いた。

親指と中指で挟んでいた、あのゴツゴツ感。添えた人差し指にあった、断面のザラザラ感。

それら右手にあるはずの感触が、急激に薄れていくような、妙な感覚に襲われたのだ。

慌てて手を見てみれば、指は掴んだままの形を保っているのに、何と肝心のカケラそのものがなくなっているではないか。

「ど、どうなってんだ」

落としたんだろうか。いや、そんなはずはない。今の今までこの手にちゃんと持っていたのに。

まさか、消えた!? そんなバカな。

そう言えば、その前に妙な声が聞こえたような気がしたけど、それも何か関係が——

「うわ、やべ」

ハッと我に返り、思わず舌打ちすると同時に目を逸らす。

「もう、最悪」

海の家の方こうに、見てはならないものを見てしまった。

骨組みが半分剥き出しになったバルコニーの隅に立つ、不気味な影。

ジョーカーだ。どうしよう、思いつきり目が合っっちゃったかも。

白々しく、鳴りもしない口笛なんか吹きながら、とっとと歩き出す。

うかつだった。いつもは意識して足早に通り過ぎる地点なのに。

今日に限って、ふと立ち止まった位置が、よりにもよってあのドライブインの真裏だったなんて。

海岸沿いの道路に面した、古びた建物。ところどころ壁が崩れ落ち、海側から見る限り、ほとんど廃墟と言ってもいいくらいにボロい。

道路側は対照的で、白い板張りの壁はまだ新しい感じだし、イルカやヤシの木をかたどったステンドグラス風の窓たちはブルー系で統一され、むしろ爽やかな雰囲気さえ醸し出している。

だけど、いつもカーテンを閉め切っているばかりか、駐車場の端から端までロープが張られていて、お店を開ける気配すら感じられない。

道路脇の鉄柱には、『ドライブイン ラストウェーブ白波しらなみ』という大きな電光看板が立っているものの、その下部分は三角形に割れ落ちたままだし。要するに潰れちゃったみたいなんだけど、このへんの子供たちの間で怪談のように語り継がれているのが、そこに住んでいる謎の老人の話だ。

何で『ジョーカー』なのかは知らないけど、皆がわざわざそういうあだ名をつけて怖がるのは分かる気がする。

伸びるだけ伸びたグレーの髪を後ろで縛り、いつ見かけても、やたらでかいサングラスをしていて。おまけに、痩せた浅黒いその顔には、ヤバそうな

傷跡まであるらしい。

そう。どう見ても、普通の爺さんじゃないのだ。

今日は大那たちに『宇宙人の仲間』にされていたけど、この前までは確か『国際的な殺し屋の一味』で、目下組織からの指令を待ちながら地下に潜伏中、つてことになっていた。

そんなわけないだろうと思いつつ、あの威圧的な風貌を目にしてからは、妙に納得させられてしまった。

とにかく正体不明で、少なからず怪しい人物であることは間違いない。

「もう大丈夫かな」

目をこするふりをしてチラッと後ろを見やると、既にバルコニーにもうその姿はなく、ホッと胸をなで下ろす。

だけど、穏やかな海も今はその静けさが逆に不気味な感じがして、オレは逃げるように急ぎ足で家路についた。

サザザン…… シャー

寄せては返す、波の音。

静かな海の営みが、沈黙する二人の空白を埋めるように、ただひたすらリピートしている。

「あのね、私……」

思いついたように口を開いた、あいつの横顔。

長い髪が、風にふわりと舞う。

「ずっと言えなかったんだけど、私ね、本当は」

ズワン…… シャー

潮騒に掻き消された、小さな声。

聞き返すと、

「行かないで、シヨウちゃん」

そこには、あの見知らぬ女の人が、いつもの悲しげな顔でオレを――

「!」

突然、視界が赤黒い煙幕のようなものに遮られた。

そのもやもやの中で、何か動物の目らしきものが、まるで月明かりをまとったナイフのように青白く、鋭く、ギラリと光を放っている。

面食らっていると、今度はその向こうから、

「――おい、小僧」

いきなり、ドスの利いた囁れ声ささやが話しかけてきた。

「――そんなにあの子のことが好きか
だ、誰？」

「――まあ、そんなにびびることはねえ。俺様はキューピッドってえやつだからな」

キューピット!?

「――トじゃねえ、ドだ。何だあ、まさかキューピッドを知らねえってのか。分かりやすく言ってやったのに」

いや、知ってるけど、その声だと何か……

「——はーん、赤ん坊みてえなかわいらしい声じゃねえから、疑ってるわけだな。これだからシロウトは困るんだ。いいか、まずキューピッドつてえのは今風の呼び方だ。元々はクピドーと言ってな、古代ローマじゃあ髭を生やした凛々しい男の姿だったわけよ。な、だから最後の発音もドが正しい。分かったか小僧」

じゃあ、そのクピドーさん本人なの？

「——だから、そうは言ってるねえだろう。ものたとえだ。よく言うだろうが、恋のキューピッドつてよ」

はあ、おじさんが、恋の……何かいまいちピンとこないな。

「——まあいい、そのうち分かる。要するに俺様は不吉なものなんかじゃあねえつてことよ。どちらかというとその逆だ。だから二度と俺様を忌み嫌うようなまねはするんじゃないぞ」

嫌うも何も、別にオレは……

「——それから、オジサンはやめる。俺様は、レキオ・レオナルトウ。由

緒正しい名があるんだからよ」

レオナルド？

「——だから、ドじゃねえ。トウだ」

ややこしいなあ、もう。どっちだつていいじゃんか。

「——何がいいものか。よく覚えておけ小僧。言葉つてえのは大事だ。たった一文字違うだけでまったく意味が違ったりするものだからな。いいか、俺様はレキオ・レオナルトウ。ドじゃなくて、トウだ」

はいはい分かったよ。レキオ・レオナルトウね。ドじゃなくて、トウね。まったく、変なところにこだわるんだから。

って、待てよ。その名前、どっかで聞いたことがあるような……

「……？」

目が覚める。

「夢か」

カーテンが眩しいほどに光を帯びて、布地の質感までくつきりと浮かび上

がらせている。

今日もいい天気みたいだ。

壁の時計に目をやると、ちょうど目覚ましが鳴る五分前だった。

それにしても変な夢だったな。わけ分かんない。さすが夢だ。

そんなことより、今日も楽しい朝の日課がオレを待ってるんだ。早起き早起き、っと。

「ん？」

鳴り出す前にスイッチを切ろうかと伸ばした手が、何か別の感触をとらえる。

「何だろう」

起き上がり、枕元のそれを目にした瞬間、

「！」

オレは思わず身構えた。

「こ、これ、何で、ここに……」

洗いざらしの、真っ白なシーツの上。

そこには、あの時手の中から跡形もなく消えたはずの、あのガレキが、その赤黒い姿を静かに、横たえていた。

3

鉛筆を走らせる小刻みな音が、そこら中で響いている。

鼻水をすすする音や咳払い以外には、話し声も聞こえてこない。

先生は先生で、日当たりのいい窓際のデスクに腰を下ろし、肘を突いた手で顔をあおぎながらひと息ついている。

週に一度ある『漢チャレ（漢字チャレンジ）』の時間。

昨日、『漢ド（漢字ドリル）』をひと通り復習していたから、今回はマジで

余裕だった。

とは言え、いつもなら余った時間を、間違いがないか見直すのに費やすんだけど、今日はどうもそれどころじゃなくて。

暇さえあれば、今朝のことを思い出しては考え込んでしまう。そう。あのガレキのことをだ。

いったい、どうして枕元にあっただらう……

少しして、四時間目の終わりを告げるチャイムが鳴った。

「はい、やめー。後ろの人、集めてきてくださいー」

甲高い声を合図に、教室内にガヤガヤが戻ってくると、

「遼哉くん、どうだった？」

晴香が、わざわざクルッと膝をこちらに向けてから、神妙に顔をのぞき込んできた。

「おお、たぶんバッチリ」

親指を立てると、「よかったあ」って嬉しそうに笑いながら、「じゃあ、たぶん私もバッチリだよ！」と、Vサインをする。

「じゃあって何だよ、じゃあって」

「だって、ボーっとしてるから、どうしたのかなあって思ってたら、見えちゃったんだもーん」

って、カンニングかよ！

「えへへ、わざとじゃないから大丈夫！」

まったく、何が大丈夫なんだか。

「でも、今日の遼哉くんやつぱり変だよ。朝からすごい難しい顔して、何か考え事でもしてるの？」

「別に、大したことじゃないよ」

と言いつつも、気にかけてくれたのかと思うと無性に嬉しくて。

「いや、実はちよっと不思議なことがあってさ」

「えー、なにに、どんなこと？」

本当は話すつもりなんかなかったんだ。内容自体がかなり地味だから、UFOMみたいに盛り上がるネタではないと思って。

でも乗ってきたから、オレもその気になって、「今朝、起きた時にさ、枕

立ち読みサンプル
はここまで

元に」まで言いかけたんだけど、
「あ、ごめん、ちょっと待って」

晴香は急に席を立つと、教室を飛び出して行ってしまった。
またかよ……心の中でそうつぶやいたら、さっきまでの嬉しさが泡のよう
に、一瞬で消えてなくなった。

たぶん、トイレか階段の踊り場に行っただろう。いつものあれだ。オレ
には分かってる。

長いため息をつきながら、ほったたを机に押し付けると、そのまま顔ごと
沈んでしまいそうな気がした。

机から伝わってくる教室のざわめきに身をゆだね、しばらくの間ぼーっと
していると、

「あのー、ちょっといいかな」

不意に、鼻のつまった濁音混じりの声がして、視界が水色の布で遮られた。
顔を上げると、すぐ横に寺沢若菜てらさわわかが立っている。

「二六」の白衣って、吉野くんだよね？」

一瞬『どく』って聞こえたけど、すぐに意味は理解した。

「えっと、たぶんそうだったと思うけど、なんで？」

若菜はオレの斜め後ろの席——つまり、晴香の後ろの席だけど、班は別だ。

ここ白波小では、給食当番の白衣は共用になっている。先週はオレたち三
班が当番だったけど、今週は若菜たち四班が当番で、その白衣を着ている。

白衣には番号がふってあり、当番の週が終わるまでは、各々おのおのが責任を持つ
て管理する決まりになっているのだが。

「あのね、ポケットからこんなものが出てきたんだけど」

と、差し出されたそれを見た瞬間、オレは凍りついた。

「これ、なあに、瓦か何かのカケラ？ 一応、大事なもののかなあとと思っ
て。はい、返しておくね？」

若菜は、机の上に赤黒いそれを置くと、「もう一回、手を洗ってこなくつ
ちゃ」と言いながら走っていった。